

# フランス語における非特定の解釈の 不定名詞句 UN N について ——総称的解釈との比較による一考察——\*

長 沼 圭 一

## 1. はじめに

まず直接目的補語に単数形の不定名詞句を持つ次の2つのフランス語の文を見比べていただきたい。

- (1) Paul a volé une bicyclette. (KLEIBER, 1981, p. 219)
- (2) Paul veut une bicyclette. (*ibid.*)

これらの文はどちらも *une bicyclette* という同じ不定名詞句を含んでいるが、その解釈は必ずしも同じではないように思われる。すなわち、(1)においては、*une bicyclette* は既にポールが盗んでしまった自転車であり、特定の解釈が要求される。一方、(2)の *une bicyclette* は必ずしも特定のであるとは限らず、ポールが欲しているのは、とにかく自転車であればどんなものでもいいという解釈もなりたちうる。この場合、*une bicyclette* は非特定のなものとして解釈されていることになる。

この非特定の解釈の不定名詞句はどのような性質のものなのであろうか。以下では、まず非特定の解釈の不定名詞句について概観し、その後総称的解釈の不定名詞句との比較を行う。

## 2. 先行研究

### 2.1. 不定名詞句の分類

稲葉 (2010a) は、フランス語の不定名詞句 UN N が解釈の点から次の4通りに分類されることを指摘している。

#### 1. 特定の解釈

(a) Ce matin, *un avion* s'est écrasé dans la mer.

「今朝、飛行機 (*un avion*) が海に墜落した。」

2. 非特定の解釈

(b) Pierre voudrait acheter *un stylo*. Il va en acheter un demain.

「Pierre (ピエール) は万年筆 (*un stylo*) を買いたい。彼は明日一本買うだろう。」

3. 非指示的解釈

(c) Pierre est *un médecin*.

「Pierre (ピエール) は医師 (*un médecin*) だ。」

4. 総称的解釈

(d) *Un homme* ne pleure pas.

「男 (*Un homme*) は泣いてはいけない。」 (p. 11)

稲葉 (2010a) によれば、「(a) の *un avion* は、今朝墜落した飛行機であるという限定が生じるため特定解釈になる。(b) では Pierre は万年筆 (*un stylo*) を買いたいと思っているが、その万年筆がまだ決定されていないため非特定の解釈なる。」 (pp. 11-12) とのことである。

古川 (1978) は、KUNO (1970)<sup>1)</sup> が名詞句を次のような4つのタイプに分けていると述べている。

a) specific NP

b) non-specific NP

c) generic NP

d) qualitative (predicative) NP

(KUNO, 1970, p. 361, cité dans 古川, 1978, p. 36)

稲葉 (2010a) の分類と対応させると、specific NP は特定の解釈、non-specific NP は非特定の解釈、generic NP は総称的解釈、qualitative (predicative) NP は非指示的解釈ということになる。

しかしながら、古川 (1978) は、この4つの分類が、「discours における名詞句の分布の観察から生れた分類であり、明らかに、一つの要因のみを基準とすることによって、行なわれた分類ではない」 (p. 36) ことを指摘している。

- (3) I want to marry *a doctor*. He is tall and good-looking. (KUNO, 1970, p. 362, cité dans 古川, 1978, p. 36)
- (4) I want to marry *a doctor*. He must be tall and good-looking. (*ibid.*)

(3), (4) は、KUNO (1970) がそれぞれ a), b) タイプとして挙げている英語の例であるが、古川 (1978) は以下のように分析している。

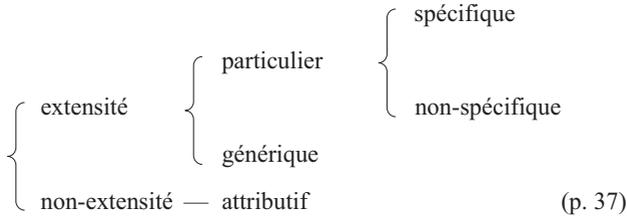
(1) [= (3)] の *a doctor* は、特定の *doctor* である。(2) [= (4)] の *a doctor* は、発話の時点では、非特定の *doctor* でありながら、結婚が実現する時点では、特定のなりうる、という潜在的な性質をもっているのである。このような点に注目するならば、a) と b) は、個別的 (*particulier*) 名詞句の下位範疇であり、a) と b) の違いは、同一の *extensité* をもつ名詞句の特定・非特定の違いなのである。(p. 36)

特定、非特定の区別について、古川 (1978) は、フランス語においては、関係詞節中の動詞の直説法と接続法の対立となって現れうることを付言している。

- (5) Jean cherche une secrétaire qui *sait* taper à la machine. (p. 36)
- (6) Jean cherche une secrétaire qui *sache* taper à la machine. (p. 37)

関係詞節中で直説法が用いられている (5) の *une secrétaire* は特定の解釈となり、接続法が用いられている (6) の *une secrétaire* は非特定の解釈となるが、いずれにせよ、KUNO (1970) が分類している a) *specific NP* と b) *non-specific NP* について、古川 (1978) は、どちらも「個別的 (*particulier*) という上位範疇に属し、この上位範疇が、c) *generic NP* と、同じレベルで、対立する」(p. 37) としている。

さらに、d) *qualitative (predicative) NP* については、a), b), c) とは全く異なった性質をもち、名詞句が一般的にもつ *extensité* という特性が不透明になるとして、古川 (1978) は KUNO (1970) による名詞句の分類を以下のように整理し直している。



## 2.2. 不定名詞句 UN N の特定の解釈と非特定の解釈

### 2.2.1. 稲葉 (2005, 2010a)

稲葉 (2005, 2010a) は、不定名詞句 UN N の特定の解釈と非特定の解釈の区別について、KLEIBER (1981) および CORBLIN (1987) を元に考察を行っている。

KLEIBER (1981) は、述語について、時空指標を含む特定化述語 (prédictat spécifiant) と時空指標を含まない非特定化述語 (prédictat non-spécifiant) の2つに分類している。

(7) Un homme est venu me voir. (p. 218)

(8) Paul a volé une bicyclette. (= 1)

KLEIBER (1981) によれば、(7) の est venu、(8) の a volé はどちらも特定化述語であり、これらの文に含まれる不定名詞句 Un homme, une bicyclette は特定の解釈になるという。それに対し、KLEIBER (1981) は、次の文の述語は非特定化述語であるとしている。

(9) Paul veut une bicyclette. (= 2)

しかしながら、KLEIBER (1981) は、(9) における不定名詞句 une bicyclette の解釈について明言はしていない。これは、稲葉 (2005) が指摘しているように、une bicyclette には特定、非特定の2つの解釈がありうるからであろう。すなわち、聞き手にとってはどの自転車か分からなくとも、すでに Paul にとって欲しい自転車が決まっている場合は特定の解釈、Paul がどの自転車でもよいからとにかく1台自転車が欲しいと思っている場合は非特定の解釈となるのである。

KLEIBER (1981) の指摘している特定化述語と非特定化述語という区別については、特定化述語とともに用いられている不定名詞句は特定の解釈に決まり、非特定化述語とともに用いられている不定名詞句はそれだけでは解釈が決まらないものと推測される。しかし、KLEIBER (1981) の挙げている例からは、動詞の時制が過去であれば特定化述語であり、そうでなければ非特定化述語であるという図式が浮かび上がってくるが、果たしてそれほど単純なものであろうかという疑問が湧いてくる。

一方、CORBLIN (1987) は、不定名詞句 un N について、指示対象が具体的に同定できるか否かによって、特定の、非特定のの区別を行っている。

(10) À plusieurs reprises, un homme se présenta chez elle : ton frère. (p. 34)

(11) À plusieurs reprises, un homme se présenta chez elle. Elle dut éconduire ces visiteurs les uns après les autres. (*ibid.*)

CORBLIN (1987) によれば、(10) の un homme は ton frère という定名詞句による同定が行われているため特定の解釈であるのに対し、(11) の un homme は複数の異なる指示対象を持ち同定が不可能であるため非特定の解釈であるとのことである。しかしながら、(11) の un homme が複数の指示対象を持ちうるのは、un homme se présenta chez elle という出来事が繰り返し起こっていることが含意されているからに他ならず、この2つの例を根拠に不定名詞句を特定の、非特定の2つに分類することはいささか疑問に思われる。

KLEIBER (1981) および CORBLIN (1987) の考察を踏まえたうえで、稲葉 (2010a) は、次のような定義を試みている。

【述語に依拠する解釈方法】

特定解釈 : 時空指標を含む特定化述語によって、時空間的に一つの限定された個体が抽出される場合、un N は特定解釈になる。

非特定解釈 : 時空指標を含まない非特定化述語は、時空間的に限定された個体の抽出が不可能であるため、un N は非特定解釈になる。

【話し手の知識に依拠する解釈方法】

- 特定解釈 : 話し手が、un N の個体あるいは種の名称などを具体的に把握し、同定可能な場合、un N は特定解釈になる。
- 非特定解釈 : 話し手が、un N の個体あるいは種の名称などを具体的に把握できず同定不可能な場合、un N は非特定解釈になる。(pp. 16-17)

稲葉 (2010a) は、これらの解釈方法についてレベルが異なっていることを指摘し、研究者の間で特定、非特定の定義のコンセンサスが見られないことを示唆している。

## 2.2.2. FURUKAWA (1986)

FURUKAWA (1986) は、様態動詞とともに用いられている un N は特定か不特定かの解釈があいまいであることを指摘している。

(12) Jean veut attraper un poisson. (p. 158)

(12) は特定の解釈と非特定の解釈の両方が可能であり、特定の解釈の場合は (13)、非特定の解釈の場合は (14) のようにパラフレーズすることができる。

(13) Il y a un poisson tel que Jean veut l'attraper. (p. 158)

(14) Jean veut qu'il y ait un poisson tel qu'il l'attraper. (p. 159)

また、(12) の後に文を続けた場合、un N をどのように代名詞化するかによって、特定の非特定の区別ができる場合がある。

(15) Jean veut attraper un poisson. Il l'attrapera demain. (p. 159)

(16) Jean veut attraper un poisson. Il en attrapera un demain. (p. 159)

(15) においては、不定名詞句 un poisson が後続文で人称代名詞 le によって置き換えられている。これにより、先行する un poisson が特定のなものとして解釈されていることが分かる。一方、(16) においては、不定名詞句 un poisson が後続文中性代名詞 en によって置き換えられている。これに

より、先行する *un poisson* が非特定のなものとして解釈されていることが分かる。

ところが、様態動詞が用いられておらず、動詞が複合過去形に置かれている (17) においては、*un N* の解釈について事情が異なっている。

(17) *Jean a attrapé un poisson.* (p. 159)

(17) においては、(12) と異なり、*un poisson* の解釈にあいまいさはないように思われる。すなわち、特定の解釈のみが可能であるように思われるのである。この解釈は (18) のようにパラフレーズできる。

(18) *Il y a un poisson qui a été attrapé par Jean.* (p. 159)

しかし、(18) の解釈は、発話時点  $t_0$  における解釈であり、過去の時点  $t_n$  における解釈はあいまいであると FURUKAWA (1986) は指摘している。(17) の過去の時点  $t_n$  における解釈をパラフレーズすると以下ようになる。

(19) *Jean a voulu attraper un gros poisson qui passait devant ses yeux et il l'a attrapé.* (p. 160)

(20) *Jean a voulu attraper un poisson et il en a attrapé un.* (p. 160)

(19) においては、人称代名詞 *le* によって、(20) においては、中性代名詞 *en* によって置き換えられていることから分かるように、(19) は特定の解釈、(20) は非特定の解釈を表している。このことから、FURUKAWA (1986) は、(17) における不定名詞句の特定、非特定の解釈の区別と時点との関係について、以下のような表にまとめている。

(A)

lecture \ moment	$t_n$	$t_0$	$t_n$
spécifique	spécificité		
non spécifique	non-spécificité	spécificité	

(p. 161)

一方、(12)における不定名詞句の特定、非特定の解釈の区別と時点との関係については、以下のような表が挙げられている。

(B)

lecture \ moment	$t_n$	$t_0$	$t_n$
spécifique		spécificité	
non spécifique		non-spécificité	spécificité

(p. 162)

この表によれば、(12)のように動詞が現在形に置かれている文に関しては、発話時点  $t_0$  において非特定のであっても、未来の時点  $t_n$  においては特定の解釈されることになる。このことは、次の (21) が示唆している。

(21) Jean veut attraper un poisson pour le manger pour son dîner. (p. 162)

すなわち、(21)においては、un poisson が後半部分で人称代名詞 le によって受け直されていることから、未来時における特定性が示されているのである。

また、動詞が複合過去形に置かれている次の (22) について、FURUKAWA (1986) は、2つの特定性が存在していることを指摘している。

(22) Jean a attrapé un poisson. (= 17)

すなわち、それは過去の時点  $t_n$  における特定性と発話時点  $t_0$  における特定性である。FURUKAWA (1986) は、前者を不透明な特定性 (spécificité opaque)、後者を透明な特定性 (spécificité transparente) と呼んで区別している。一般に、透明な特定性は不透明な特定性に勝っているため、(22) は透明な特定性、すなわち発話時点  $t_0$  における特定性で解釈されるのである。

しかしながら、様態動詞を含む文においては、それが複合過去形に置かれた場合でも、解釈はあいまいなままである。

(23) Jean a voulu attraper un poisson. (p. 164)

(23) においては、発話時点  $t_0$  における特定、非特定の解釈が欠如しており、次のような表によって表されうる。

(C)

lecture \ moment	$t_n$	$t_0$	$t_n$
spécifique	spécificité		
non spécifique	non-spécificité		

(p. 165)

このように、(23) は過去の時点  $t_n$  の解釈のみが残り、特定、非特定の区別についてはあいまいなままなのである。

### 3. 非特定の解釈の UN N と総称的解釈の UN N

以上で見たように、非特定の解釈の UN N は、一般に文脈がなければそれとは判断できず、一文だけ取り出した場合、特定の非特定のかで解釈があいまいであることが分かる。以下では、発話時点において非特定の解釈を持ちうる UN N を含む文に絞って議論を進めていくことにする。

まず、このような非特定の解釈を持ちうる UN N の特徴として、FURUKAWA (1986) が指摘しているように、様態動詞を含む文に現れるという点が挙げられる。

(24) Jean veut attraper un poisson. (=12)

(25) Paul veut une bicyclette. (= 2, 9)

実はこのような特徴は、いわゆる総称の UN N にも見られる特徴である<sup>2)</sup>。

(26) Une jeune fille doit être modeste. (KLEIBER, 1977<sup>3)</sup>, p. 5, cité dans 古川, 1978, p. 46)

(27) Un piano doit toujours être soigneusement accordé. (ROCHET, 1977<sup>4)</sup>, p. 298, cité dans 古川, 1978, p. 46)

- (28) Un pâté doit être glacé avant d'être servi. (ROCHET, 1977, p. 298, cité dans 古川, 1978, p. 46)
- (29) Une jeune fille peut avoir de l'audace. (古川, 1978, p. 46)

総称の UN N は、様態動詞だけではなく、さらに幅広いモダリティ表現と両立しうる。

- (30) Un bouquet ferait plaisir. (CULIOLI, 1976<sup>5</sup>), cité dans 古川, 1978, p. 46)
- (31) Un homme ne pleure pas. (稲葉, 2010a, p. 11)

稲葉 (2005) は、主語位置の UN N について、以下のように述べている。

不定名詞句 〈un N〉が主語位置に現れた発話は、不定名詞句 〈un N〉について言及しているのではなく、文全体が表す出来事・事実を提示している。そのため、述語によって選出される指示対象は、述語が示す出来事・事実を担うただ一つのものであるため、その解釈は特定解釈にしかならない。(p. 51)

たとえば、次のような例が典型的な例であると考えられる。

- (32) Ce matin, un avion s'est écrasé dans la mer. (稲葉, 2010a, p. 11)

しかしながら、あくまでも稲葉 (2005) が指摘している内容は、個別的解釈の UN N が特定のであるか、非特定のであるかという観点からの考察であると考えられる。個別的解釈に限らず、総称的解釈の UN N も考慮するならば、主語位置の UN N が常に特定のというわけではないことになる。逆に、UN N が総称的に解釈されうるのは主語位置に現れている場合のみであり、東郷 (2002) が指摘しているように、総称文以外では特定の解釈しか現れない。

- (33) a. Aujourd'hui, je vais vous parler d'un castor.  
b. Aujourd'hui, je vais vous parler du castor.  
c. Aujourd'hui, je vais vous parler des castors. (p. 14)

すなわち、「b. の le castor と、c. の les castors は総称読みができる。ところが、a. の un castor は特定読みしかできない。この事実は示唆的である。le N / les N は文の述語と関係なく総称の意味を持ちうるが、un N が総称読みできるかどうかは、文の述語に依存していることを示している。un N 自体には総称の意味はないのである」(ibid.) とのことである。

このように、UN N 自体に総称の意味がないとすれば、非特定の UN N が主語位置に現れた場合に総称的解釈となり、それ以外の統辞的位置に現れた場合が一般的に非特定の解釈と言われているものなのではないであろうか。言い換えれば、いわゆる総称の UN N は、非特定の UN N が主語位置に置かれたときの一変種に過ぎないのではないかという仮説が浮かび上がってくるのである。

KLEIBER (1981) は、UN N を主語に持つ次の (34) の解釈が 2 通りあることを指摘している。

(34) Un chien aboie. (KLEIBER, 1981, p. 221)

すなわち、特定の解釈と総称的解釈である<sup>6)</sup>。この 2 つの解釈をパラフレーズすると、以下ようになるであろう。

(35) Il y a un chien qui aboie.

(36) N'importe quel chien aboie.

(35) が特定の解釈、(36) が総称的解釈である。ここで、(34) に現れるような UN N を、つぎの (37) のように直接目的補語の位置に現れる UN N と比較してみることにしよう。

(37) Paul veut une bicyclette. (= 2, 9, 25)

(37) の une bicyclette は 2 通りの解釈、すなわち、特定の解釈と非特定の解釈が可能である。パラフレーズすると以下ようになるであろう。

(38) Il y a une bicyclette que Paul veut.

(39) Paul veut n'importe quelle bicyclette.

(38) が特定の解釈、(39) が非特定の解釈であるが、(34) のような主語位置に現れる UN N と比べて、UN N そのものの解釈に関して明らかな違いがあるようには思われない。

非特定の解釈の UN N は、N という概念を満たしている任意の一個体を示しているに過ぎない。これが直接目的補語の位置に現れる場合、特定の主語や出来事的叙述を行う動詞により、具体的なイベントの中に組み込まれ、特定の時間的な定位がなされうる。一方、非特定の解釈の UN N が主語の位置に現れる場合は、具体的なイベントを展開することが困難であるため、特定の時間に定位しない超時的な述語としか結び付くことができない。その結果、文全体が概念レベルにとどまり、一般的真理や規範などを表すこととなるため、総称文として扱われることになるのである。しかしながら、主語位置の UN N にのみ注目するならば、決して単独で総称を表しているわけではなく、非特定の解釈の UN N であるに過ぎない。

また、付言すれば、いわゆる UN N を用いた総称文は、語用論的には、しばしば命令、忠告、非難といった発語内行為を伴っている。UN N という任意の個体として提示するのは、一種のぼかし効果であると言える。

#### 4. おわりに

本稿では、フランス語における非特定の解釈の不定名詞句 UN N について、総称的解釈の不定名詞句 UN N との比較から考察を行った。この2つのタイプの不定名詞句は本質的には異なるものではなく、非特定の解釈の UN N が主語の位置に現れた場合に総称的解釈が生じるに過ぎず、いわゆる総称的解釈の UN N は非特定の解釈の UN N の一変種であると考えられる。また、不定名詞句 UN N そのものが総称的解釈を持つことはなく、非特定の解釈の UN N が主語位置に現れることにより、文全体に対し超時性、非出来事性が要求され、結果的に総称文として解釈されることになるのである。

#### 注

\* 本研究は JSPS 科研費23520515 の助成を受けたものである。

1) KUNO, S. (1970) : « Some properties of non-referential noun phrases », *Studies in general and oriental linguistics*, TEC Company, Tokyo, pp. 348-373.

- 2) 総称的解釈の UN N については、藤田 (1985)、福島 (1991)、東郷 (2002)、稲葉 (2010b)、拙論 (2013) を参照のこと。
- 3) KLEIBER, G. & R. MARTIN (1977) : La quantification universelle en français, Colloque d'IVRY sur la Quantification dans les langues naturelles.
- 4) ROCHET, M. (1977) : *Étude comparative de systèmes de déterminants en français et japonais*, thèse dactylographiée, U.E.R. de linguistique de Paris VII.
- 5) CULIOLI, A. (1976) : *Transcription*, Séminaire de D.E.A., 1975-1976, Université de Paris 7, Département de recherches linguistiques.
- 6) (34) について、KLEIBER (1981) は、特定の解釈の場合、出来事的述部 (prédictat événementiel) と結び付き、総称的解釈の場合、非出来事的述部 (prédictat nomique) と結び付くことを指摘している。

### 参考文献

- 稲葉梨恵 (2005) : 「フランス語における不定名詞句〈un N〉の統語的位置とその解釈の関係について」, 『筑波大学フランス語・フランス文学論集』, 20, 筑波大学フランス語・フランス文学研究会, pp. 39-56.
- 稲葉梨恵 (2010a) : 『フランス語における照応形式の機能的研究』, 筑波大学博士 (言語学) 学位請求論文.
- 稲葉梨恵 (2010b) : 「不定名詞句 un N の総称解釈について」, 『筑波大学フランス語・フランス文学論集』, 25, 筑波大学フランス語・フランス文学研究会, pp. 139-154.
- 東郷雄二 (2002) : 「フランス語の不定名詞句と総称解釈」, 『京都大学総合人間学部紀要』, 9, 京都大学総合人間学部, pp. 1-18.
- 長沼圭一 (2013) : 「フランス語における総称的用法の不定名詞句 UN N について」, 『愛知県立大学外国語学部紀要 (言語・文学編)』, 45, pp. 199-217.
- 福島祥行 (1991) : 「UN N の総称用法」, 『フランス語フランス文学研究』, 59, 日本フランス語フランス文学会, pp. 89-101.
- 藤田知子 (1985) : 「un N « générique » について」, 『フランス語学研究』, 19, 日本フランス語学研究会, pp. 1-21.
- 古川直世 (1978) : 「フランス語における総称名詞句の特性」, 『文藝言語研究言語編』, 3, 筑波大学文芸・言語学系, pp. 31-51.
- CORBLIN, F. (1987) : *Indéfini, défini et démonstratif*, Librairie Droz, Genève-Paris.
- FURUKAWA, N. (1986) : *L'article et le problème de la référence en français*, France Tosho, Tokyo.
- KLEIBER, G. (1981) : « Relatives spécifiantes et relatives non spécifiantes », *Le français moderne*, 49-3, pp. 216-233.

## Le syntagme nominal UN N à lecture non-spécifique en français —comparaison avec la lecture générique—

Keiichi NAGANUMA

Dans la phrase *Paul veut une bicyclette*, l'interprétation du syntagme nominal *une bicyclette* présente une certaine ambiguïté liée à la lecture spécifique et la lecture non-spécifique qui peuvent en être faites. Dans le cas d'une lecture non-spécifique, le syntagme UN N renvoie à une occurrence facultative qui remplit l'intension ou la notion de N.

Si l'on compare ce syntagme UN N à lecture non-spécifique et celui qui est caractérisé par une lecture générique tel que *un homme* dans *un homme ne pleure pas*, ni ce premier ni ce dernier ne désigne un individu spécifique. Le syntagme UN N à lecture générique n'apparaît cependant qu'en position de sujet alors que celui à lecture non-spécifique n'apparaît généralement pas en tant que tel.

En prenant en compte cette similarité et cette configuration, les deux types de syntagmes nominaux indéfinis peuvent difficilement être considérés différemment. Le syntagme UN N à lecture dite générique ne serait alors qu'une variation de UN N à lecture non-spécifique.

Lorsque le syntagme UN N à lecture non-spécifique occupe la position de sujet, il ne peut pas faire référence à un individu particulier. Le prédicat doit donc être non-événementiel pour permettre une interprétation générique. La phrase entière pouvant être interprétée de façon générique, le sujet UN N ne peut toutefois pas se suffire en tant que générique et doit toujours rester non-spécifique.